

令和 3 年 6 月 18 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K04799

研究課題名(和文) 感性の涵養とコミュニケーション能力育成のための国際的俳句指導法の開発

研究課題名(英文) Development of Haiku Teaching Methods to Nurture Aesthetic Sensitivity and Communication Competence

研究代表者

中西 淳(Nakanishi, Makoto)

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：10263881

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、北米における俳句の教材価値や、その授業のあり方を探るための俳句プロジェクトを、北米の小学校と共同で実施した。そのプロジェクトは次の三つの要素を取り入れて、長期間にわたり展開された。申請者による俳句ワークショップの開催と俳句授業の実施、北米の教師による俳句授業の試行、申請者と北米の教師による俳句ミーティングの開催。その結果、教師の俳句及び俳句教育への理解が深まるとともに、俳句を用いた授業の開発がなされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

俳句の国際化は進んできている。しかし、そうした状況を念頭に置いた俳句教育の研究はほとんどなされていない。北米において俳句を用いた授業は、我が国のように一般的かつ活発に行われているとはいえない。そうした状況の中で俳句を用いた授業の開発がなされれば、我が国の学習者と北米の学習者による俳句の交流は促進され、それによる教育的効果は今より一段と高いものになっていくであろう。本研究の成果は、国内外の俳句教育の発展に貢献するところが大きい。

研究成果の概要(英文)：In this study, we conducted a haiku project in collaboration with an elementary school in Canada to explore the value of haiku as a teaching material and how it should be taught in the classroom in North America. This project was developed over a long period of time, incorporating the following three elements: (1) a haiku workshop for teachers and a series of haiku lessons for students; (2) exploratory haiku lessons developed and conducted by teachers; and (3) a haiku meeting for all the participants in which to discuss the value of haiku as a teaching tool and how to teach it. This study has shown that the haiku project can help North American teachers to deepen their understanding of the essence of haiku and the value of haiku education and to develop effective haiku lessons.

研究分野：国語教育学

キーワード：俳句教育 HAIKU 国際交流 コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

近年、俳句の国際化はますます進んでいる。2014年には、ベルギーのブリュッセルにおいて、日欧国際俳句シンポジウムが開かれ、各国の俳句事情が紹介されるとともに、欧州におけるこれからの俳句のあり方についての協議が行われた。また、2017年には、俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会が設立され、俳句の魅力の世界に発信していこうとする動きもある。俳句教育のあり方も、そうした国際化を念頭に置いた探究がなされなければならない。しかしながら、国内外を見渡してもそれに関する研究は、十分に行われているとはいえない。

そのような状況を背景に、申請者は、これまでに国際的視点からの俳句指導研究を、次のように行ってきた。まず、北米における俳句受容や俳句教育の現状を慎重に検討しながら、学習者に俳句の魅力を感じ取らせるための指導法を開発し、授業を実際に行うことによってその有効性を検証した(中西淳「北米におけるハイク指導の実践的研究」全国大学国語教育学会編『国語科教育』66集,2009年,pp.59-66,査読有)。次に、北米の教師を対象として、俳句観・俳句教育観を豊かにするためのワークショップを試み、その有用性を検証した(中西淳「北米におけるハイクワークショップの有用性 国際交流を実りあるものとするために」全国大学国語教育学会編『国語科教育』76集,2014年,pp.55-62,査読有)。さらに、俳句による国際交流の指導法(国際間の句会)を開発し、我が国と北米の小学生に授業を行うことによって、その有効性を検証した(中西淳「俳句による国際交流の実践的研究」全国大学国語教育学会編『国語科教育』80集,pp.71-83,2016年,査読有)。

ところで、北米において俳句は我が国のように馴染み深いものではない。また、俳句の授業は一般的にかつ活発に行われているとはいえない。俳句による国際交流を長期にわたり展開していくためには、それに関わる教師の俳句及び俳句教育に対する深い理解と、それに基づく俳句授業の開発が必要である。それをどう図り実現していくのが、次に取り組むべき重要な課題となっている。

2. 研究の目的

以上のことを背景に、本研究の目的は、北米の小学校共同で、北米における俳句を用いた授業のあり方を探究するとともに、その手立ての有効性を検討するところにある。

3. 研究の方法

(1) これまでの研究の整理・検討

これまで取り組んできた研究(『感性の涵養とコミュニケーション能力育成のための実践的・国際的俳句指導の研究』(2014年度-2016年度・基盤研究(C))の成果を踏まえながら、本研究を進める上での課題や方法を確認する。

(2) 北米において季語を用いることの教育的意義の検討

北米と我が国の俳句事情を踏まえながら、北米において季語を用いて指導することの意義を明確にする。

(3) 俳句プロジェクト(共同研究)の構想・実施・考察

北米における俳句の教材価値やその指導のあり方を探るための俳句プロジェクトを構想する。

北米の小学校に出向き、俳句プロジェクトを実施するための具体的な打ち合わせを行う。

北米の小学校のスタッフと共同で、俳句プロジェクトを実施する。

俳句プロジェクトの成果を考察する。

(4) 研究成果の情報発信

教師や俳人が参加する国内外の学会、及び研修会・研究会において、研究成果を発表する。

4. 研究成果

(1) 北米において季語を用いて指導することの教育的意義

北米の俳句創作において季語は一般的な約束事になってはいない。ただし、それに相当する言葉は存在する。こうした北米における俳句事情や、我が国における季語の役割を勘案しながら、北米において季語を用いて指導することの意義を検討した。そして、学習者に俳句の魅力を感じさせることができる、自然や季節、地域の風土や文化に対する関心を高めることができる、我が国の学習者と北米の学習者との俳句による交流が容易になるといった利点があることを指摘した。

(2) 北米における俳句授業の開発とその手立ての有効性

北米において俳句の授業を開発するためには、教師の俳句観・俳句教育観の深化は欠かせない。それを図りながら俳句の授業を開発していくための手立て(申請者による俳句ワークショップの開催と俳句授業の実施、北米の教師による俳句授業の試行、申請者と北米の教師による俳句ミーティングの開催といった三つの要素を取り入れたもの)を案出した。さらに、それを俳句プロジェクトと名付け実施した。

その結果、多くの教師に、俳句及び俳句教育観の深化（俳句は書くことを苦手とする学習者にその成就感を味わわせる教材として適している、文法を教える教材として使える、学習者のマインドフルネスの保障につながる等）が認められた。

さらに、北米ではあまり見かけることのない俳句を用いた授業（国語の授業、第二言語の授業、体育と関連させた授業、図書館利用と関連させた授業等）の開発がなされた。例えば、一般的に第二言語（フランス語）の授業で俳句を用いることはない。ここでは、第二言語（フランス語）で俳句を作りそれに関する絵を描きアート（俳画のようなもの）として作品を完成させるという授業が5年生を対象に行われた。授業後の学習者の感想には、「フランス語で俳句を作るのはかっこいい（cool）」、「自分の俳句はフランス語の方がいいような気がする」、「創造的になることができた」、「違った言語で書くことはとても楽しかった」、「フランス語で作ると英語とは異なってゆったりとした感じになる」といったものが数多く確認することができた。学習者は俳句を楽しむとともに、英語とフランス語との語感の違いを感じ取っていたといえるであろう。また、体育の授業では、体力作りをねらいとしたゲームを行う中で、感じたこと・見たこと・気づいたことを、グループで俳句にしていくという授業が1年生を対象に行われた。授業者からは、些細なことをもとに俳句を作りみんなで読み合うことの楽しさを学習者は感じ取っていたという報告がなされた。

また、俳句の授業を行っていく上での実践上の具体的な課題（シェアリングの時間の確保等）も明らかになった。

俳句プロジェクトにおける授業開発のための手立ては有効であったということができる。この研究成果は、第139回全国大学国語教育学会秋期大会において発表した（題目：「国際的俳句指導プロジェクトの展開」）。

(3) 国際大会における情報発信

上記(1)(2)の研究成果の一部を、俳人が多く参加する国際大会 Haiku North America Conference 2017（題目：The Power of Kigo in Making Haiku）、Haiku North America Conference 2019（題目：Haiku as a Tool for Community Building）において、また、教師が多く参加する国際大会 International association of Laboratory schools Conference 2018（題目：Short Poems with Long Impact: How Haiku Teaches Thinking, Feeling and Caring）において、発表した。

(4) 現職教員研修会及び研究会での活用

現職教員が参加する研修会において、海外の俳句事情を紹介しながら、俳句による国際交流のあり方に関する講演を行った（第54回越智今治夏季国語教育研修会：題目「学校教育における俳句とハイク」）。また、現職教員が参加する研究会において、ショートショート創作の発想と俳句のそれとの共通点を指摘しながら、他文種における俳句活用のあり方に関する講話を行った（越智今治国語同好会2019年6月例会：題目「創作指導におけるショートショートの可能性」）。

(5) テレビ番組制作への貢献

研究成果の一部を、俳句に関するテレビ番組制作に必要な情報として提供した。その情報は、番組冒頭での海外俳句普及状況を紹介する際に活用された（テレビ東京「世界!ニッポン行きたい人応援団 “芭蕉” を愛す 17歳女性が俳句旅 600km」2019年1月14日、2020年9月14日放映）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中西淳	4. 巻 秋号外
2. 論文標題 物語の創作指導におけるショートショートの可能性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ことばだより	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中西淳	4. 巻 139
2. 論文標題 国際的俳句指導プロジェクトの展開	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 全国大学国語教育学発表要旨集	6. 最初と最後の頁 259-262
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Makoto Nakanishi
2. 発表標題 Haiku as a Tool for Community Building
3. 学会等名 Haiku North America Conference 2019（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Elizabeth Morley, Richard Messina & Makoto Nakanishi
2. 発表標題 Short Poems with Long Impact: How Haiku Teaches Thinking, Feeling and Caring
3. 学会等名 International association of Laboratory schools 2018 CONFERENCE（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Makoto Nakanishi
2. 発表標題 The Power of Kigo in Making Haiku
3. 学会等名 Haiku North America Conference in 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中西淳
2. 発表標題 国際的俳句指導プロジェクトの展開
3. 学会等名 第139回全国大学国語教育学会秋期大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関